

●「孤帆」(東京都小金井市) 15号

「わたしたちは寝ても覚めても小説が好き」でありたい(編集後記)とあるように、小説創作を中心にした会誌のようだ。メンバーはこの雑誌ばかりか他の同人誌にも加わるなど、創作活動は旺盛だ。

「夜、コンビニの前、雨」(海山竜子)は、大学を卒業して就職しその間、恋愛もし、とごく平凡な道を歩んでいる一人の女性のちよびり切ない(青春模索)ストーリー。恋愛に憧れ、結婚に憧れ、しかし、いざ男性と付き合おうと、相手の経済力への不安や、また仕事の忙しさの中で疲労を覚えていくなど、未だ定まらない青春の未熟さという姿が訥々と描かれていく。何に悩んでいるのかもわからない——、そんな平板な自分にも気づいていながら踏み出せずにいる主人公。俗っぽくて軽い悩みと言えばそれまでだが、(シヨウセツ)はこの種シケた「俗」とも付き合っていないかなければならない。紙幅の都合もあるのだろうが、手際良く短くまとめるよりはむしろ長々とこの愚かしさと退屈さを掘り進め、書き継いでいってはどうだろうか。

●「未踏」(東京都中野区) 63号

年一回の発行と少ないが、創刊が昭和四九年と息の長い同人誌である。小説、詩、エッセイに加えて俳句掲載にも力が入れている。

今号では、「俳人八幡城太郎さんの声——その追想と感謝を込めて——」(石村柳三)が、心温まる伝記風俳人論となっていて興味深かった。

八幡城太郎は、新興俳句の旗手として知られていた日野草城

もつれが描かれている。その戸惑いやもつれは、とりもなおさず「他者」との出遇いによるものである。何不自由なく育った「家」。そこは、默契によって微温的に守られている共同体だ。そこから外へ出れば、異質な社会や人間関係が待ち受けている。他人あるいは他者とは、異質さの別名である。作者は、謂わば世間を知らない一少女を新しく入学した学校という環境や、また例えば、部活という授業以外の場所へと連れ出し、そこで教師や知り合って間のない部員たちと関わらせ、(成熟)の契機といったテーマをさり気なく設定したように読み取れる。他愛ない一少女の学校生活をめぐるドタバタ模様に見えるが、作者の視線は存外と先にあるようだ。

●「河」(東京都新宿区) 153号

朝日カルチャーセンターで学ぶ文学仲間によると思われる「河の会」が編集。今号は三篇の小説。いずれも中篇で、中でも「夏子からの伝言」(南川千禾子)は、きつちりと整った文章で、丹念に描かれている。

高齢のうえ病で倒れた実父を身を粉にして看病する《娘》の日々が克明に綴られていくが、この展開の合間合間に数年前に癌で亡くなった夫への看病の日々や生活のあれこれも点綴される。しかし、全編を圧倒的に占めているのは、実父の看護の模様である。周りの家族の者も気遣うほどに、時に過剰とさえ思えるほどの献身的な看護の姿が描かれていくが、それは娘の父親への愛情の深さによるものであるにしても、いささか執拗とさえも見えてくる。それは何か——。

幼い頃から格別に可愛がつくれた父親の死を前にして主人

の系譜に連なる俳人で、日蓮宗寺院の住職でもあった。筆者・石村氏は、教団の機関紙の記者時代に城太郎取材し、それが縁で「城太郎俳句」に傾倒、同門の仏教人としても尊崇の念を抱いてきたが、その積年の思いがこの一文を書くきっかけになったようだ。

同じ宗門人であっても、ただその看板のみで共鳴し合うことはあり得ない。宗教的シンパシイも人の存在があつてこそである。俳人との出遇いやエピソード、そしてその足跡に触れ、筆者の心に残る幾句かが紹介されている。

花それぞれの刻もち耐ふる秋の色

ふとした折にも口ずさむほどに忘れられない一句だという。「花それぞれの刻もち耐ふる……」の句を味わいつくした時、何かを書きたい、書かねばならないと思ひ詰めてきた筆者にペンを執らせたのではなかったらうか。

●「素粒」(富山県富山市) 7号

同人は十人。ほぼ全メンバーが寄稿していて、切磋琢磨している様子がうかがえる。

「ゆかりの煩悶」(白川荘子)。熟練した達者な筆運びが際立っている。登場人物たちの心理描写にも難渋さがなく、しつかりとした文体の一篇である。

染原ゆかりという女子高校生が主人公。家庭は地方の素封家らしく、幼い頃からピアノ、バレエ、書道、英会話、その他習い事を半ば強制的に仕向けられてきた令嬢。自分を包んでいる富裕な恵まれた環境に違和を感じつつも矜持ともなっているプライド高い一女子高校生の、学校での人間関係への戸惑いやら

公は、その全身全霊の献身を糧に自らの中の何かを確かめようとしていたのではなかったか。作品後半部にさしかかってわずかに数行でしか触れられていないが、父親が逝って三回忌を迎えるある日の件り、回想される夫との夫婦生活の中にあつた過去のわずかな齟齬……不安定な愛、そしてそこからの回復の願い。父親の看護にあれほどに身を挺しようとしたのは実はその代償としてではなかったのか。

●「サロン・ド・マロリーナ」(東京都大田区) 創刊号

インターネットで知り合った創作仲間が全都一府六県から集って雑誌創刊となったという。

「自分の小説を誰かに読んでもらいたい、読んでくれた人の心をスパークさせたい、僕は、世界が欲しい」(同人誌発刊の趣旨/竹内みちまろ)、と若々しい欲求が熱く語られている。

併せて、作品を(発表することへの)意味や意義などについても吐露されていて、書き手としての悩ましが切々と綴られている。何はともあれ船出へのエールを送りたい。

九編の小説が創刊号を飾っている。長編、中・短編、また掌編ありと、小説創作のみの執筆である。前記の発刊趣旨を読んで、若い世代の人たちの集まりかと推測されたが、「やな場まで」(塵芥川文之介)など、かなりの年季が入った書き手も参加しているものと思われる。

「やな場まで」は、筆名は感心しないものの作品構成が巧みで、読ませる。鮎釣りの薬場には鮎料理を食べさせる床式の小料理屋がある。男女のカップルや様々な人間たちがやってくる。人は皆それぞれに訳ありだ。そんな心の秘密というようなものを

持ち合いながら関わり合う様子をカット割りにして描いていく。鮎料理を食する者、川のほとりを散策するカップル——、いつしか川の流れば人生の移ろいにも見えてくる。

前後するが、作品冒頭第一節に、鮎釣りにやってきた渡瀬徳次という名の人物が、川に突き出した崖下の斜面に薄紅色の花を咲かせている山茶花の木を見つけて、それを取りに行こうとして恐る恐る対岸に向けて川を渡っていくという話が置かれている。以後のストーリーの展開の中にこの男は出てこない。作品全体の結末部に到ってふいにこの男が再登場する。それも、川に溺れて流されているところを救出され一命を留めるという話し回しであるが、人の世の危うさを象徴させているようで、なかなか心憎い演出である。因みに、この話し回しの男の名にしろストーリー自体も、「阿太人の築打ち渡す瀬を早み心は思へど直に逢はぬかも」(万葉集・巻十一)から連想された一篇だろうか。古典に造詣の深い作者・鹿芥川氏にうかがってみたい気がする。

●「季刊午前」(福岡県福岡市) 41号

創刊して十年、同人は二十人をこえる。詩が十篇、それに詩論一篇と、詩作品のウエイトが高い雑誌だ。

今号では、「始点としての『四千の日と夜』(吉貝甚感)が出色。詩人田村隆一の第一詩集を基軸に、その戦後の出発と『詩の発生』を探った詩(人)論。論者:吉貝氏自身が詩作を行っており、その実作者としての言語観に裏打ちされた鋭い論考である。『詩句は衝突し合うことで、論理の整合性に絡め取られることを拒絶する。了解可能な情緒におけるわかりやすさの罨のなか

やられ考えさせられた。四百字にして六枚程度の掌編だが、巧まずして成った一篇だろうか。

他に、時代小説「羅生門の鐔」(周防凧太郎)がある。刀の鐔を作る鐔師の子弟をめぐる怪異譚。この種、時代小説物は、ストーリーを盛り上げていく緊密な文章表現が見せ場。今少しの精練度があればという思いが残った。

●「海峡」(愛媛県今治市) 23号

小説の他、詩、エッセイ、また海外翻訳物の連載ありと、堅実な雑誌製作の姿勢がうかがえる。

「彼岸花」(西山慶尚)。高校時代の旧友の墓参を思い立った主人公が、亡き友との思い出を回想しながらその墓のある寺を尋ね歩く。やがてようやく寺院を探し当て、墓参を済ませる。その帰り道、昔、父親に連れられて行ったある寺をふと思い出し、立ち寄ってみる。するとそこで、亡き友が交際をしていた女性に偶然に出くわし、五十年前の若かりし頃の思い出に浸り、語り合う。

事件らしいことも起こらず、ただ静かな追憶に終始しているが、文章が平明で飾りがなく、それだけに立ち去り際に眼に映った棚田一面に広がる真っ赤な彼岸花の遠景も毒々しくなく静謐に見えてくる。何も無いが、何も無いことを描いてみるのも散文の一つの業である。

●「イマジネーション」(山梨県甲斐市) 7号

同県文芸協会発行の機関雑誌で、県内在住の執筆陣による小説、詩、評論、エッセイ、シナリオ、研究と多岐にわたる内容だ。エッセイが五編、同県出身の作家にまつわる話や民俗に関わる

から戦後は、切り離されなければならなかったのだ。その切断面においてこそ、戦前的なるものは意味を持ち、戦後の生は生自体を獲得できるのである。その情緒の継続的変質は、おそらく今現在も続いているのだろう。もちろん、継続傳承され続ける情緒との共生、混合、そして対峙、拮抗をくり返しながら」(同誌十頁)と。現代の〈コトバ〉がひとしなみに背負わされている苦闘でもある。

●「Garance」(福岡県福岡市) 17号

総頁数二百頁をこえ、表紙など体裁も良く、充実味のある雑誌だ。今号は一年ぶりの発行とあるが、執筆陣には自著を持つ人もあり、多彩だ。

巻頭「姉の写真」(吉永忠行)は、終戦をほぼ一年後に控えた昭和十九年五月に海軍に志願入隊した「私」が、新兵として軍事教練や軍隊生活をはじめたその矢先に姉の計報を報らされ、その悲しみの中で生前の姉とのエピソードが回想されるといったそれだけの掌編だが、ある奇妙な感覚を抱かされる。

せっかく海軍に志願入隊した一青年の「私」だが、その決意は勇み立つほどのものではなく、他に能力もないから志願したという頼りない動機を呟いてみたり、また、結核だった姉の死を悲しむその心情の描かれ方が淡々としているというよりもどこか、か細い悲しみ」といった感情に浸されていて、読後、思わしくない戦況や敗戦を予感させる戦時下の国内の空気、また大戦を闘っているなどといっても、個々の国民の心情は一筋の飛行機雲を遠目に仰ぎ見てたらずんであるような頼りないものではないかかったのではないかな等々、戦争の影というものが思い

る話など、地域ならではの趣きがあり、楽しい。中でも、「ぼくと熊王徳平」(花里鬼童)が、豪放磊落、硬骨の異色作家として知られる故熊王徳平の在りし日の姿を彷彿とさせ、面白い。

小説「重慶日報」は、「富士川」で第七回坊っちゃん文学賞を受賞した鬼丸智彦氏の中篇。日露戦時下、中国重慶領事であった徳丸作蔵と彼を取り巻く人たちに材を取った作品。(清国維新)を願う徳丸の肝煎りで「重慶日報」という日刊新聞が彼の地で発刊された。中国の近代化と中国人民の教育がその企図であったが、新聞発刊は対露・西欧列強に抗すべく当時の日中両国の協力発展という一面において大いに成功をおさめた。だが、日露戦勝後、徳丸自身が密かに危惧していた方向へと政情はうごいていく。日本軍部が大陸へと触手を伸ばしていく時代、自ら一体の観音像を持ち、自身は精いっぱい篤実であるうとした一外交官がいたという史実は、(歴史教科書)からではなくこのような作家の筆によらなければ掬い上げられないという思いを強くする。(矢部一雄)

